

「市町域でのボランティア活動推進方策検討委員会」ワーキング論点整理

※複数のワーキングでの議論をテーマごとに論点整理。
※左欄の番号順に並び替えると各ワーキング議事録となります

1. 背景、前提、価値など				
No	論点	小見出し	内容	ワーキング名
3	最終報告作成について	検討の対象者・団体について	<ul style="list-style-type: none"> ・中間報告書活動をする側からの意見がない。課題を持つ人へのアプローチはどうするのか。 ・「する側」・「される側」だけではなく、利用者の主体、自立性の視点は必ず必要。 	枠組み①
93	ボランティアとボランティア活動、地域活動	活動を指す言葉 ボランティア活動・地域活動・ボランティア活動	<ul style="list-style-type: none"> ・「ボランティア活動」というより、「地域活動」といった方が動きやすいこともある。公園清掃など、自分の住んでいるところに帰ってくることもある。「自分たちのまちをよくする」ことから入る場合、「ボランティア」より「地域活動」のほうが入りやすいことも。必ずしも「ボランティア」ということばにこだわる必要はないのでは。 ・要は「自発的に自分の力を出して、社会と関わり、自分も相手もよくなる活動」 ・「地域活動」ということばは、逆にあまり一般的ではないこともある。 ・ボランティア活動として本来持っている意味を伝えていかなければいけないが、あまりにも固定観念が根付いているため、ボランティア活動という言葉を使い出した、ということか。 ・本質的な意味としてはボランティアもボランティアも代わりはないと思うが、「ボランティア」ということばには「利他性」「無償性」の意味が根ざしており、セルフヘルプグループなどは支援対象からはずされてしまう。 	連携②
20	姿勢	「ボランティア活動」という言葉について	<ul style="list-style-type: none"> ・この報告書はボランティア活動という言葉で統一するのか。「ボランティア・市民活動」という言葉もある。 ・「民間の」という意で、非営利有償も含むことができる。また、NPOも含めての使い勝手のよさはある。 ・「ボランティア活動」という言葉に関する注釈は必要。 	枠組み①
18	姿勢	福祉の概念について	<ul style="list-style-type: none"> ・福祉概念の整理は枠を広げるという考え方でいいのか。 ・「福祉」を境界線を持つ「分野」ではなく、複数分野に関わる価値概念としてとらえることが必要では。 	枠組み①
82	福祉、市民のとらえ方	「市民福祉社会」 市民をもう一度 共通につなぐものが「福祉」	<ul style="list-style-type: none"> ・「市民福祉社会」というコンセプトは重要。都市化によってバラバラとなった市民をもう一度つなぐ価値として「福祉」がある。 ・市民は「自立（律）した市民」のみというイメージ。「市民福祉」ではじめて、「誰もが」という部分が担保される。 	組織②
6	ミッション・価値	「気づき」の支援と地域福祉人材の養成	<ul style="list-style-type: none"> ・地域にある福祉課題、さまざまな課題に「気づく」ことがまず大切だと思う。 ・気づきはとても大切で、そこから主体的に考えられるようになる。報告書の中でも大切にしたい。 ・学び、気づきから、自分自身もより市民に近づいている、と実感している。 ・そういう学び・気づきができる人材が増えていけば、それだけ市民自治が進んでいく。 	枠組み①
7	ミッション・価値	DOだけの人材（労働力）ではなく、「住民自治」を担う力量を形成すること = PLAN,DO,SEE 全てに関わること	<ul style="list-style-type: none"> ・ベースに住民主体や課題を持つ人がないとおかしい。「気づき」があれば、「変える」ことができる、ということは議論に盛り込む必要がある。 ・「変える」ことは、ボランティアだけをすればいい、というDOの人材だけではなく、plan,do,see 全てに関わる地域福祉人材を養成していく、それが住民自治につながる、ということ。これが、ボランティア活動を推進するときの価値になる。よって立つところ。 ・最終報告は、価値と実践とスキルが一体化したものを。 	枠組み①

5	ミッション・価値	活動の先にあるもの地域・暮らしが変わること	<ul style="list-style-type: none"> ・コープのサポートセンターの活動から見えるのが、地域が変わる、くらしが変わること。関わるボランティア・サークルの一人ひとりが力をつけていき、結果として地域が変わることを、サポートセンターでは支援する、ということが大切と思う。 	枠組み①
10	ミッション・価値	地域活動とボランティア活動	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアセンターには、「地域がいや」という人が逆によってくる。 ・居住する町ではなく、となりまちで活動している人もいる。 ・V 活動自体が社会化し、生活の場との関わりの気づきがではじめている ・最終的には、自分たちのくらししていく地域でより良いくらしをしたい、ということが出発点。 	枠組み①
2. 社協ボランティアセンターのミッション、特性、目指すもの				
No	論点	小見出し	内容	ワーキング名
79	社協 VC のありかた	社協を同根としながら市民に開かれたボランティアセンター	<ul style="list-style-type: none"> ・「だれのために、何をするのか」を明確にすること。 ・社協のボランティアセンターか、市のボランティアセンターか。社協のためか、市民のためか？ ・社協を同根としながら、市民に開かれたボランティアセンターというあり方ではないか。 	組織②
80	社協のミッション	社協ボラセンのミッション「地域福祉人材（資源）づくり、仕組みづくり」	<ul style="list-style-type: none"> ・社協ミッションの中身を推進するのに、ボランティアセンターという機能が必要となってくる。 ・社協にとってボランティアセンターは、「ミッションを推進するための人づくり」を担うところ。 ・社協ボランティアセンターは「地域福祉人材（資源）インキュベーター」 ・「誰もが安心していきいきとくらし続けることができるまちづくり」に向け た、「人材づくり」と「仕組みづくり」といえるか。人材は気づき、育て、土壌づくりを行う。仕組みは、「つなぐ」、「組織化」、「仕組みづくり」等が重要な機能。 ・社協ボラセンの場合、筒井氏提唱の一般的な「ボランティアコーディネート機能」にプラスアルファがある。そこが社協ボラセンならではのところ。 	組織②
83	人材、専門性	社協ボランティアセンターは「3人称の活動」、コミュニティワーク	<ul style="list-style-type: none"> ・一人称は「私が」「自分で」。二人称は「私とあなた」の間で問題解決。三人称は「われわれ」の世界。コミュニティワークは、三人称の専門性を持つ。 ・グループワーカー、コミュニティワーカーとしての専門性を持つことが、ワーカーには求められる。 	組織②
46	ミッション	地域社会の中に、「価値を持ち、自立的に動く人材」を育成すること	<ul style="list-style-type: none"> ・住民の中に、同じ視点を持って地域で動ける人をつくっていかないと、ボランティア活動の推進にはならない。 ・以前、アドバイザーという位置づけがあった。住民で、活動者でありながら、コーディネーター的な役割も担っていくという位置づけ。今回、このアドバイザーというのがしっくりくるかどうか分からないが・・・ ・本来はそうでないとだめ。ボランティア協議体等も支援していこうと思ったら、「ボランティアセンターの中で」ではなく、「ひとつの思いの中で、自分たちが」、ということ。 ・兵庫県はコーディネーターの設置が早く、活動が推進され、コーディネーターの役割がある程度達成できた、という見解か。そうであれば、コーディネーターが引いても、代わりに担える人材がいるはずだが、そうはなっていない。 ・支援の仕方として、コーディネーターありきでしてきた支援と、そうではない支援の仕方と分散型でしていくことが、地域やまちなど、広いものを考えたときには必要だと思う。言うは易し、行なうは難しで、期間もかかると思うが。 ・対象者も住民全体に広げていこうと思った時には、コーディネーターだけで関わっていくのではなく、それぞれが自立した機能として果たしていけるようなものに。 ・役割の重複を大切にした連携、役割の変化、という視点も必要。 	支援方策②

75	ミッション、VCの主導と主体性	ボランティア自治・市民自治とボランティアセンター	<ul style="list-style-type: none"> ・もっと、活動・連携・議論しやすくし、問題提起・情報交換・意見を聞く機会を設け、人を育成できる組織のための話をセンターの職員に提起した。 ・ボラセンが引っ張ってきてしまい、連絡体が自分たちで考える芽や力をそいできたきらいがある。今、連絡体に反対のアクションをしても反発がある。 ・ボランティア自治を実現する場として組織や体制、参画の場づくりも考えていく必要がある。 	組織①
76	ミッション、VCの役割	主体はボランティア、社協VCは「仲介」役	<ul style="list-style-type: none"> ・地域性がある組織が決まると思う。仮設住宅のときも別組織、実行委員会で組織を作った。 ・社協はボランティアが困ったとき、求めるものの中とりをしてくれた。 	組織①
81	ミッション・特性・支援スタイル	個のニーズを中核に、スパイラルを描き、巻き込みながら地域を耕す過程	<ul style="list-style-type: none"> ・社協ボランティアセンターの支援スタイルは、地域の中で、巻き込み、問題解決を図っていくこと。当事者の持つ個のニーズを中核としながら、個人を耕し、グループを耕し、そして地域を耕すこと。 ・それは、スパイラルを地域で展開していくことといえるのではないか。個でできないことをグループで、グループでできないことを地域で行っていくこと。「地域で」という点にこだわることは、社協ならではの支援スタイル。 	組織②
27	社協VCのミッション・役割	「講座・活動」は「課題への気づき支援」→「人材育成」、「まちづくり」	<ul style="list-style-type: none"> ・社協ボラセンでやろうとしているのは、「まちづくり、福祉コミュニティづくり」。その先にあるのは、生活課題や生きづらさを抱えた「人」。人の関わりの中から、活動を入りに、その人の生活課題があること、支えるのに必要な役割に気づくこと、それらから、新たな支援も進めていけることが大切。 ・そこが社協でしかできない関わり。人材育成、まちづくりの動き。担当者であるコーディネーター自身がしっかり意識と理念を持っていることが必要。 ・手話講座を入りに、聴覚障害の人の課題に触れて、ますます課題への取り組みや手話の習得に意欲をもやす、その支援が大切。 	支援方策①
65	社協VCのミッション・役割	「地域福祉人材インキュベート」という焦点と、用語の使い方「まちづくり人材の養成」	<ul style="list-style-type: none"> ・ニーズを抱えた方への支援もある、という点は？ ・すでに活動している人も、「人材の不足」は大きな課題。 ・一番下に、ボランティアグループ、セルフヘルプの支援者養成など ・社協VCやるべきところは「未関心層」→「関心層」の部分ということか。 ・「福祉のまちづくりに向けた土壌づくり」、「住民主体のまちづくり」の「主体形成」は、社協でもVCの部分なのでは、と思うのだが。 ・ここを抜きには語れないのではと思う。これまでの議論の焦点もここだ。 ・それを伝えるのに、「インキュベート」という言葉を使うかどうか。遠くなるイメージもある。社協の持ち味だ、ということは、そうなのだが。 ・インキュベート、ということばを、もっと柔らかくできないだろうか。やっぱ、インキュベートかな？ ・「住民主体のまちづくりの土壌づくり」ということか。それなりにさまざまなことをちゃんとやるが、力を入れ、重点とするのが、人材づくりか。 ・人材育成というのか、福祉人材の育成というのか、まちづくりの人材というのか、そこまで持っていきたい。その人の特性があらわれる人材に育つ。 	支援方策②
64	社協VCのミッション・役割	社協のボランティアセンターについて、今発信したいこと「気づきと行動の変容を支援する」	<ul style="list-style-type: none"> → 社協VCは「地域福祉資源インキュベートセンター」という点は？ ・「インキュベート」ということばは「孵化」、「立ち上げ支援」までいくか。 (ことばが難しい？) ・「気づきと行動の変容を支援する」こと、「無関心層から関心層へ」を中心に発信することについてはどうか。それより、もっと重要なことがあるか。 ・うちの場合はこれでいい。 	支援方策②

24	社協の特性を活かした支援	役割が入れ替わるという視点	<ul style="list-style-type: none"> ・活動している人も、活動される側に「変化する」という視点が必要。 ・「持ちつ持たれつの関係性」を緩やかにネットワーキングするのが社協本来の役割。 ・当事者、「地域の福祉課題を抱えている人がきやすい、入りやすい、関わりやすいところ」という視点が必要。これまでの顧客の流れを変えていく。 ・役割の変化と、役割をとることを支える、ということもボランティアセンターの役割では、一人ひとりが主体性を発揮できる機会を提供、一人ひとりの自立した生き方を支援する、そのための方策。 ・一人ひとりの自立につながる、ということをこちらが意識していることが重要。 	支援方策①
53	社協VCの強み、支援方策	「当事者組織の組織化」と「支援者組織の組織化」をつなぐ	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアセンターの強みは、当事者と活動者の両方に関わる点。「当事者組織の組織化」と「支援者組織の組織化」の両方に関われ、両方をつないでいける点では、それによって、地域に拡げていける。 	支援方策②
84	社協ボランティアセンターの特性	社協ボランティアセンターの独自性	<ul style="list-style-type: none"> ・社協が「住民主体の協議体」であるという点が、社協ボラセンが他のボラセンと違う点。各地の社協ボランティアセンターのあり方は、社協のDNA（協議体）を持ちつつ、センター独自の機能を持ち、各地域の特性に即したあり方で、市民に明らかにされていかねばならない。 	組織②
44	ミッション	脅威に対して・・・社協VCに共有ミッションがないことが課題	<ul style="list-style-type: none"> ・うちでは明らかに対抗軸が出てきている。市の2種類の流れ。市民活動を支援しましょう、ということ。支援型、テーマ型、有償活動を支援する、ということ。 ・もう一点は、行政スリム化に向け、助成金の出し方を考え直しましょう、ということ。公的な分野をにえるNPOを育成していこう、という流れ。 ・今共有でき行き詰まった時に立ち返るミッションがないことが課題。 	支援方策②
42	ミッション・特性	社協のいい点「個別対応」できること（⇨行政は制度や公平主義にとられる）	<ul style="list-style-type: none"> ・現状の自分のボラセンから書いたが、他の組織があり、対抗軸があるところ、ないところで書き方が違うのでは。 ・「個別対応」「数に囚われない」ということがあるのでは。 ・行政は「制度に当てはまるかどうか」が基準だが、社協は「この人がこのことで困っている」ということに対して対応していける。 	支援方策②
97	連携・協働	社協に求めるもの、弱み	<ul style="list-style-type: none"> ・社協は民間から見たら、堅い部分がある。 ・枠組みがきちんとしているため、トワイライトゾーンへの対応がなかなかできない ・社会福祉分野に関しては、専門的なバックアップの組織体制があるのは強い。 ・地域に根ざしている部分も強いと思う。生協の場合組合員は見えるが、面としての地域は社協かな、と思う。 ・コープは「個」が見える。そこから「点の課題を面にしていく部分」は連携でできるのでは。 ・サロン活動は、被災者支援での地域活動実体験から始まり、展開した。「相手のためだけでなく、自分のためでもあった」という部分もある。 ・サロンを進めていけば、高齢者も子どもも、多様な人が参加できる場に。 ・外に働きかけていくのは社協だけではできない。 ・地域の課題を社協の中で見つける部分と、他団体から、NPOなどが自分のところだけでは解決できないとき、共に取り組む課題とある。 ・そういう部分も、ある程度社協で受け皿となっていれば・・・ 	連携②

54	支援方策	人権意識を広げていくための、窓口づくり、場づくり、機会づくり	<ul style="list-style-type: none"> ・人権意識、人権感覚をいかに豊かにするか、というのが、付加価値。そこに気づけることが、地域福祉課題解決に向けた出発点。 ・人が変わっていくところに関わる、気づかれたとき、とてもうれしい。社協のVCだからこそ、そこまで踏み込んでいるといえる。 ・本人だけではなく、地域の中の一人が、思っていることを出す場があることで、地域の中で広がっていける。わからないことも、「あんたもわからへんの？わたしもわからへん」となると「ひとりの思いだけじゃない、そしたらみんなで調べてみよか」と動き出す。それを出してこれる場が、ボラセンだったり、地域の中にいるアドバイザーだったりするのは。集まる会合の場、役員会など。そういう声を出せる窓口や場、機会をつくっていくことが大事。 ・「誰もが安心していきいきとくらし続けることのできるまちづくり」の、「誰もが」の、一番声を出しにくい人の声を、いかにそのような機会を使ってだしてもらえらる機会や場をつくるか、というのが、大切なことか。引きこもり、孤立状態の方こそ、いかに声を、思いを出す場をつくってもらえるか。 ・我々が言っているのは、活動者主体というより、どちらかという、「対象者主体」。地域の課題解決に向けた取り組み。 ・今の議論は、個人の未関心層にいかにかきかけるか、というテーマが中心だが、その流れでやっていくか。 ・無関心層は、自ら気づきにはこない。 	支援方策②
57	支援方策	福祉学習 意思決定主体を育てるのも社協しかできない！	<ul style="list-style-type: none"> ・「広げる」ため、子どもを通じたアプローチについては？福祉学習は、社協が持っている大きな手段といえる。 ・福祉学習の範囲も広がっている。住民への福祉学習、計画策定主体の養成など。 ・「人材養成」実効性のある計画の中身を住民主体でやれたら・・・仕組みづくり、意思決定を行う主体を育てる。それを社協がやれたら。行政にはノウハウがなく、社協しかできない部分では。 	支援方策②
3. 社協ボランティアセンターのありかた 組織について				
No	論点	小見出し	内容	ワーキング名
78	議論の進め方	組織に関する検討のすすめ方	<ul style="list-style-type: none"> ・組織体制の論の進め方の項目としては、 ①市民のボランティアセンター運営への参加のあり方 ②職員の機能と役割 ③社協ボランティアセンターの組織体制 ④社協他組織との関係、社協内での位置づけ等 ⑤ボランティアセンターの組織運営のあり方 ⑥連絡体との関係性のつくり方（協働のつくり方）に整理する。 ・ボランティアセンターの独自性を考えるため、業務、機能の洗い出しが必要。 ・社協におけるボランティアセンターのあり方、社協のあり方そのものも議論する必要がある。 	組織①
38	視点	ボランティアセンターは、ボランティア（市民）に共感を伝え、ボランティアの立場を（も）考える	<ul style="list-style-type: none"> ・視点だが、V活動推進の担当者（コーディネーター、専門員）がどちらの側でものをいうのか？課題の解決のため？それとも組織のため？その人の立場に立ってものをいう職員がどれだけいるのか。例えば、高齢者のケアについて、ケアマネはニーズを持つ人の立場、コーディネーターは、ボランティアの立場や気持ちを考える。 ・担当者の視点をどうするのか、要援護者を守るのか、ボランティアを守るのか、組織を守るのか、それとも自分自身を守るのか。コーディネーターはボランティア（市民）に共感を伝える。気持ちよく仕事をしていただくためには、施設も、課題も、さまざまなことを知っておかなければならない。調整が必要かと思う。 ・基本はまちづくりだと思う。例えばショートステイのお年寄りを迎えに行くかどうか、となると、僕はまちづくりから見て迎えに行くと思う。ケアマネのあり方、組織なのか、個人なのかかわからないが、根っこが一緒であれば、まちづくりで共有する部分があれば、連携のオファーがあっても、共有できる。 	支援方策②

62	組織担当 ワーカー の専門 性と機能	<p>担当者の目的意識</p> <p>・担当者の課題意識を地域に伝えていく(伝道者の役割)</p> <p>→ 専門職としての担当者の機能が必要</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・担当者が課題をしっかりとらえていないとできない。 ・地域のこの課題と一緒に考えていく人をつくっていききたい、というしっかりした目標を持っていないとだめ。担当者が熱意をもってやるのと、何人集めた、などを考えるのでは全く違う。何かに突き動かされてやること、なぜか自分がそうなったか、ということ、誰かの生きづらさに触れているとか、地域の生活課題が見えていること、ワーカー、Coの専門性などの条件があわさって、「地域課題を掘り起こそうか」などの行動に移る。 ・もう少し緩やかでもいいから、地域の人にそういう生きづらさや生活課題に気づいてもらえる機会があれば。その機会は、農協の集まりだろうが、社協主宰だろうが、いろいろあればいいと思う。 	支援方策 ②
9	ミッション・価値	<p>社協の価値コミュニティワーカー</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本市では7地域に全てコミュニティワーカーがいる。各地区ワーカーもボランティアコーディネーターの仕事もしている。 ・みんながコミュニティワーカーである、ということ(共通価値基盤) ・サイコロのどの面で市民と向き合っているか?のちがひ。社協は常に中核はコミュニティワーカー、ジェネリックなワーカーであることが大切。住民の生活は一体的。組織内で担当者が分かれている。 	枠組み①
28	対象・本検討のターゲット	<p>社協の管理職の福祉観と支援対象</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・多様化しているという現実を社協の役員が、分かっていない。高齢者、障害者福祉だけやっていけばいいという、彼らが考える福祉と現実の社会で求められている福祉は違う。時代についていく必要がある。 	支援方策 ①
66	小地域との連携	<p>気づき・人材育成「小地域との連携、都市部の支援方法」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・都市部では、気づき関係の支援が、市一本ではしんどいところがあって、小地域の旧地区でやってもらうようにもっていく。 ・真ん中のきついところは社協で。第一弾で気づいた人を、例えば「地域福祉人材養成講座」など、もっと「きつい」やつを。コアな、マニアックなやつをやれば。 ・今、そういう取り組みを別の人がやっていることがややこしい。僕が小地域も、講座もやって、だったら見えるのだが。 ・それは都市部の社協の合意形成をいかに図っていくか、という部分。 ・こういう社協になろうと思ったら、社協の中で連携は不可欠である。ばらばらでは絶対にできない。 ・地域との関わりプラス、テーマでも。両方を見ていく。 ・うちは、地域とテーマとで分かれている。その結び合いが難しい。 ・まずは、全市であって、徐々に各地域にできていっている。しかし、全ての活動がそういくわけではない。 ・地域によって、理解がしっかり受け止められる地域と、余り受け止めていただけない地域がある。サロンでもそう。半数はできたけど、それ以上はなかなかできない。 ・地域の中に顔が見えている人がいるか、社協が知ってもらえているか。 ・地域組織の担当者が、ころころ替わることはないか。旧市では、3~4年に関われるが、ニュータウンでは1年交代。なかなか顔が見える関係がづくりにくい。市レベルでは、地縁組織との連携が必要。 	支援方策 ②
91	組織	<p>組織ワーキング「個のニーズを中核に、スパイラルを描き、巻き込みながら地域を耕す過程」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・スパイラルというのは「個の課題をみんなの課題にしていく」こと。 ・深化、発展していく、という意味合いもある ・考え方の部分と取り組みのらせんによってふくらむ、豊かになる、というイメージか。 ・地域のあり方によって、個を受け止めて、どう地域に返していくか、その方法が変わってくる ・生協は、暮らし、を中心にすすめているが、暮らしをみても、Aの地域ではこうだが、Bの地域では違う受け止め方をしていることがある。そのような面から、暮らしの場として、地域に着目している。生協と社協は、同じことをめざしながら、重点がちょっと異なるように思った。 ・生協は暮らしから入り、社協は考え方の前提に地域がある。アプローチの違い。 	連携②

45	ミッション	<p>ミッションの共有に向けて組織としての「評価軸」と「職員研修」の必要性</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・職員が5名程度の町社協であれば、共有ができる。たとえば、電話対応等をみていると、できる。しかし、都市部などで部屋が分かれ、分化が進むと難しい。職員に共通のミッションを持つには、しっかりした職員研修等が必要となってくるのでは。 ・研修で言われるより、立派な先輩のやっていることを聞いていくと、同じ仕事の仕方をするわけではなく、立派な先輩といわれるあの人は、こんなやり方をしている、という点に気づきがあればいいと思う。はじめの気づきの部分、プラスアルファの部分は、個別の研修があれば。 ・その人が本来持っている資質の中で、「あの人についていきたい」というものをもっていなければ、それは成り立たない。われわれの職場は評価されない。すごくつらいこと。自分がこの路を進んでいいのかどうか、を誰も評価しない。何もそれが還元されることがない。自分自身が気づいていなくても放たらかし。組織としてきちっと位置づけていく方針が、コーディネーターではなく、「ボランティアセンター」に必要。それがないと個人としても、全体としての認知もされていかない。社協職員なら気づきがある人が来ているとは思いますが、必ずしもそうとはいえない。 ・以前に他社協の組織をみせてもらうと、6割が事業系の職員だった。会計ではいった職員がいたが、会計だけやっていればいいわけではない。共通の視点は共有し、その上で仕事をしていくことが必要。 ・人事異動は必要。 ・対抗軸があろうとなかろうと、自組織が「こうするところ」というミッションは入れる必要がある。 	支援方策②
39	ミッション(が不明確、認知されず)	<p>VCやボランティアについて、社協内でも知られてない!</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアセンターのあり方が他の部署に理解されていない。ボランティアの意思を出す場が持ちにくい。ケアマネは利用者本位で動いていく分野だが、ボランティアの意思やどう動くのか、活動にどういかされるかはあまり知られていない。社協内でボランティアセンターが知られていないことは弱みだと思う。 ・社協内でもそうだし、他のケアマネ等に知られていないことは連携の面でもマイナス。ボランティアセンターは便利使いする場所ではなく、「まちづくり」。ボランティア活動というひとつのツールを使ったまちづくりなんだ、と。自分たちの理念や考え方に合わないことについては、断ることもある、ということは明確にしてもいい。 ・そのことは、組織のほうを向いて決めるのではなく、地域の住民やボランティア活動や対象者など、地域を向いて考えるということでは。 	支援方策②
92	連携・協働	<p>社協内部署間の連携について</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・トワイライトゾーンを大切にす。郡部ほど、重なっている。重なりつつ、それぞれに特化した部分もある。 ・地域福祉推進室の中にVCも地域福祉担当もある。連携がしやすい。 ・課が分かれているため当事者がどこが窓口なのか見えにくいことも。 <柔軟な体制> ・トワイライトゾーン(重なり合う領域)をどのように担うか? ・組織がアメーバー状に変化を起こし、強化するような体制づくりをしていくことが大切。 <仕組み> ・1つの課だけでは解決できない、またがる事項については、共に取り組めるような場と仕組みが必要。課同士のミーティングは必ず必要。 <組織ミッションの職員間共有の大切さ> ・組織全体としてのミッションの共有、それに向けた各担当の位置づけとその中の各担当のミッションを職員がきっちり把握し、意識して業務を行うことが必要。「組織内の合併」が求められる。 <生協のミッション検討・共有の仕組み> ・社協はそのような共通ミッションが持ちやすい組織なのは。生協では毎年ミッションを各スタッフが集まって検討、文章化し、評価を受ける仕組み。大変だが、毎年職員とともに確認ができることはいい。 	連携②

35	連携・組織	具体的な VC 像、課題を抱えた方が声を上げることができる 専門員領域との重なり	<ul style="list-style-type: none"> ・課題を抱えた方が、声をあげてもいいところ、という視点がこれまで低かったように思う。 ・傾聴する、受け入れますよ、来てください、という姿勢は大切。 ・それは、専門員的な仕事とされてきていた部分。しかし、両方必要であるところの話では確認された。なぜなら、受ける側の地域の人は同じ人だから。 ・職種は違うが、目指しているところは同じ、ということ。ささまち 4 と、この報告書の目指している看板は一緒でないといけない、ということ。 	支援方策①
31	社協のミッション、視点	「1つの社協の根」(共通の価値・ミッション)と「たくさんのアンテナ」(活動・事業)	<ul style="list-style-type: none"> ・社協活動の根っこは一つだと思う。それは、まちづくりであったり、より豊かな人権意識を持つこと。社協は介護保険や小地域福祉活動等様々な活動がある。多様な人たちを社協の活動、まちづくりに引き込んでいくには、さまざまなアンテナづくりが必要。社協にとってのアンテナは多いほうがいい。 ・さまざまなアンテナづくりに、プレーキをかける管理職や組織があるので、対応が必要。 ・国際貢献等他分野の話でも、根っこは同じところについているはず。 ・テーマ、分野はどんな活動でもいい。関わる過程を通じて、課題や人、まちを理解してもらおうのが大切。 ・社協という組織のありようが変わっていくことが大切。 ・社協は職員の研修の機会が少なすぎる。 ・社協として、幅広い対象に絡むための理屈作りが必要。 	支援方策①
85	他セクションとの関係、運営のありかた	他セクションと重なる領域をつくる、増やしていく → はざまをなくす、協働へ	<ul style="list-style-type: none"> ・各セクションで、各職員が何を行うのかを定義し、明らかにする職務分掌は必須。業務の意図と機能を明らかにすることが必要。 ・各セクション間は、総務、地域、VC 等、タテワリになっている状態が多い。ここでは、「はざま」をつくらないため、セクション間の重ねていく領域を増やしていくことが大切。利用者をたらい回しにしない努力を。 ・重なっているところに本質がある。その領域(トワイライトゾーン)に関して、協働する環境を作ることが大切。 	組織②
86	組織体制、他セクションとの関係、運営のありかた	組織内協働の仕組みづくり、進め方、組織のあり方	<ul style="list-style-type: none"> ・例えば、住民の声を聞く、課題をキャッチする「インテーク」は、地域もボラセンも一緒に行う、など。 ・協働の場をどう設定するか。 ・フレキシブルにものを考えられる組織、アメンバー状に、ありようが常に動いている組織のイメージ。 	組織②
32	社協内連携	ボランティアのイメージ、地域福祉担当とボランティア支援の関係の根っこは同じ、コミュニティワーカーとしての共通言語の必要性	<ul style="list-style-type: none"> ・地域福祉活動とボランティア活動の部署が離れている。この関係をどうつくるかも一つの課題。助成金等、支援の濃淡の線引きはどのあたりなのか。 ・やはりボランティア活動が帰ってくる場合は地域だと思う。 ・ボランティアという言葉に「無償＝ボランティア」「好きなことしている」というイメージしかない方がまだたくさんいる。地域の人に伝えたい意味が浸透していない。住民で活動している人に意識化してもらおうことも社協の仕事。 ・地域と V を当たり前のように分けて、線引きしている人もいられない。報告書には、地域と VC が同じ部署にしている事例なども入れては。 ・対象領域が重なり合っている、地域部門と VC のつながり方を示せれば。 ・社協としての一番大事な部分とボラセンとしての大事な部分は同じ。一番上に掲げるものは、理念はささまち 4 も、この最終報告書も同じであるべき。 ・気づき、活動、気づき、活動というサイクルは、おそらく同じ。 ・少なくとも、社協のワーカーとして同じことを共通のことばで言えるような職員集団でなければいけない。そうすれば、分けて考えていることも根っここのところでは同じ、という組織上分けざるを得ないものも、専門員とコーディネーターそれぞれが同じことをやることの大切さ。 	支援方策①

社協ボランティアセンターのありかた 支援方策について				
No	論点	小見出し	内容	ワーキング名
37	基本姿勢・連携 (支援対象の広げること)	関係分野グループとの関わり方は、ありのまま「福祉」に関わってもらおう	<ul style="list-style-type: none"> ・ 支援の濃淡、とよくいうが、そのためにはこれからは「うちはこのようにミッションで、こんなところだから」という理屈づくりが必要かと思う。みなさんのところではどうか。 ・ お互い知っており情報提供をし合うことがプラスになる、地域をよくすることにつながるのであれば。 ・ 例えば、環境のグループと、子どもたちや子育て支援のグループとからめて、山で遊ぶ、などのプログラムをすれば、社協も関われるのでは。 ・ 薄くでも、拒否しないでつながっているということは必要だと思う。 ・ 関係分野の団体には、何かのプログラムに関わってもらい、福祉人材にしていく取り組みが大切ではないか。地域や生活、まちづくりとの関わりで、持っている技術や専門性を活かしてもらおう、という発想。 ・ 「地域を変える」「地域をよくする」というところでつながっていきそう。「まちづくり」でもいい。 ・ 環境の人たちも、福祉を狭義の固定観念ではなく、そのままいい、ふだんやっていることが福祉になる、ということが出せるような機会をつくる。 ・ 当事者の人も、自身の課題解決のためのボランティアを派遣してほしい、ということだけではなく、地域にその当事者自身が住んでいること、思いを発信し、まちづくりにつなげていくことが大切。 ・ 未関心層へは子どもを通じていくと効果的な場合がある。親が子どもの活動に関心を持つ、など。 	支援方策①
95	参加支援	参加を可能にし、自発的・継続的・自立的な活動を育てるために	<ul style="list-style-type: none"> ・ このあり方検討は、これまで活動に参加していない人をいかに活動に参加してもらうかが大きなテーマでは。 ・ 啓発は大きな課題。活動者の顔ぶれの固定化など・・・。 ・ 地域や社会に役割がない人に、プロジェクトを仕掛けて、子どもや若者に伝統技術を教えてもらうよう、役割を担ってもらう取り組み等。 ・ 座談会的なものだけより「ここに来たらこれを学べた」というものも必要。 ・ 地域社会に、「インプット、アウトプット」ができるような仕組みづくり。 ・ 講座終了後、地域で広めたり伝えたりできる参加の仕組みがいる。学んだら、発揮したい！ ・ お膳立てされるのではないやで、参加型で、自分たちでつくれるものでないといやという人も多い。 ・ 目指すところは、参加型の場で、参加者のいろんな意見を一つに組み立てていける、継続的にそのような場を持てるようなスキルを持つスタッフが必要ではないか。 ・ 主体的な意識が高い高齢者の声を受け止め、「100人のやさしい知恵」として発信した事例もある。 ・ 未関心層へのアプローチは、VCだけでも限界がある。地域福祉として、各部署それぞれでアプローチしていく必要。 ・ コープのVCでも、重点は「今活動している人、グループ」。新しい人に対してどうアプローチするか、まではなかなかいかない。 ・ 今、「傾聴ボランティア」講座が人気。要はコミュニケーションの技術だが、これは友愛訪問や施設訪問ボランティアにつながるもの。しかし、自分自身にも返ってくるし、活動にも活かせるもの。 	連携②
50	支援方策	課題をもつ人が変容するプロセス	<ul style="list-style-type: none"> ・ 個の課題を受け止めて、地域課題としていくためのボランティアセンターのかかわり方は？そのプロセスは？受け止め、地域に広げていくには？ 	支援方策②
94	支援方策	ボランティア活動と自発性	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本来は「自発的」な活動が、登録により、げたを社協に預けてしまう。そのため、自発性が失われ、社協が依頼する活動になってしまう。 ・ 「自発性は揮発性」ということばもある。自発性を保つための仕組みも考える必要がある。 ・ 個人より、グループ化したほうが、継続性は強い。 ・ 友人をつくる、人の輪を広げる、というところから入る人も多い。 	連携②

72	支援方策・支援対象	「市民活動センター」と他分野の活動	<ul style="list-style-type: none"> ・市民活動センターという方向性が出ている。対応できない他分野の活動があるのでは。 ・うちは、新規団体等のファイルはつくり、情報は持っておく。しかし、率先して環境の講座はうちでは開かない。ただ、環境の講座をやっている団体情報は把握しておく、という姿勢。 ・市民活動支援の要望が増えてきたとき、どう対応していくか。 ・ミッションを発信しようと考えている。「なぜあるのか」「なぜないのか」に対して「こういうところだからある、ない」と言えるように。 ・「こういうところ」というのがあり、ニーズに対応し、評価がされ、その延長に、達成感がある。 ・うちのV連絡体の会長は環境系。助成もわきまえて、申請していない。 ・Vまつりなどでは、しっかりせっけんを売っている。 ・環境系の人福祉まつりに来て、逆に気づいてもらうこともある。 	支援方策②
73	支援方策・支援対象	窓口の広げ方について	<ul style="list-style-type: none"> ・窓口は、濃淡はあっても、広げていこう、プログラムで関わり、まちづくりとの関わりで活かしてもらう、という視点で。 ・支援の資源「無限」「半無限」というわけかた。 ・有限のものについては、理由が要る。組織の目指すもの、なぜその団体が利用できる・できないのか。セルフヘルプも対象にいれながら、考えていきたい。 ・支援を開けるところは開き、根幹のところは濃度を高くして・・・ 	支援方策②
61	人材育成	ボランティア活動推進スタイルの共感を広げ、深めていくことを軸としたスタイル	<ul style="list-style-type: none"> ・今あなたが課題と思っていることを解決するには、あなた自身がボランティア活動をすることも選択肢のひとつでは、とはいえるのでは。 ・メニュー例示に終わっているのでは。事前の訪問の相談を受け、紹介できれば講座、ということが多いのでは。 ・前年度の事業計画を実施する、形から入る、ということも多いのでは。 ・講座はどこでもやっているが、講座の中身ややり方は非常にさまざま。 ・何がしたいですが、が聞ける。2回目以降の企画をともに考える、など。 ・連絡体とともに考えることも。そういう講座作りのノウハウも入れたい、ということか。 ・人材育成の手法としての講座について、実施のねらいや視点、前提を共有したいということ。 	支援方策②

49	ミッション	社協のミッションと人材育成のプロセス	<p>・人材育成の先には、活動者が地域活動をするなり、NPO を立ち上げるなり、先の広がりがあるといいと思う。ボランティア活動には限界があり、満足していればいいが、もっと社会化して行って、アクションをかけて、という人材が育っていけば。たとえば、介護保険事業所の資格をとったり、NPO をとったり、さまざまな形で発展していくと思うので、それも人材育成の先にあること。それらのプロセスを支援していくことも、社協でできる。支援のための講座等支援をしていく。</p> <p>今までだったら、講座を開いて、グループができて、自分たちで地域完結型のグループを楽しくやっていて、年に1回お食事会等をして、「よかったねえ、楽しいねえ」と自己満足しているのだけれど、私たちが今目指しているのは、その人たちが地域の課題に気づいて、その朗読グループや手話のグループが地域の課題に気づいて、その活動をしなが、その活動の背景を理解する人になり、その活動もあるけれど、何か他の形につながり、展開していけるような人を育てたい。芽が出て、そこから枝葉となって、成長、発展していく部分、そこを支援していきたい。それが全てでは。</p> <p>そういう人が地域でどんどん増えていくと、まちづくりも進むし、地域も住みやすい地域になるし、連携もできて、いいまちになっていくと思う。それは、都市も郡部も共通。</p> <p>・住民主体、住民自治。ボランティア活動がめざすものは、市民自治を進めること。それを進めるのがボランティアセンター。</p> <p>・「社協職員は黒子としてがんばっており、評価されることがない」というが、そういう職員がいて、はじめてこのような取り組みを進めることができる、と評価していきたい。</p> <p>・何か普遍的な課題があって、その人が、働きかけがあることによって、関心を持ち・・・という継続的な流れのプロセスがないと、全てリンクしているので、その流れを表現できないか。「参加支援」の一部だけを取り出しても、その後の成長、地域福祉人材へ発展していく過程がないと見えてこない。</p> <p>・自分のことや家族のことしか見えていない人が、だんだん周りの人のことが見えてくる。一緒になって考えていく友達ができていく。視野が広がっていく。大きな市なら作業所があるが、小地域にはない。課題によってないものも。大きな都市も郡部も同じでは。</p>	支援方策②
33	連携	支援の前提は当事者に寄り添うこと。連携は「ありき」ではなく「必要に応じて」(社会資源)	<p>・基本は寄り添うことだと思う。地域に密接であるため、受け止める、寄り添うことが仕事。社協に相談があったこと自体が、評価される。聞いてくれる、と思うからこそ、受け止めることが必要。相談を受けたら受け止め、共に考えたらいい。そのため関係機関とネットワーク体制をもっている。</p> <p>・顔が見えているのは、支援対象だけではなく、関係機関との関係作りも大切ということ。個別、一人ひとりの関係づくり。根底の部分はささまち、この報告書共通に必要。ボランティア団体だけを対象にしていないということ。</p> <p>・DVなどは個別性の高い問題だが、基本的には、社協としてやらなければいけないことは、まちづくり、地域住民に対する支援。その問題は一旦ちゃんと受け止めて、ワーカーとして何が必要なのかを考えて、この場合ネットワークが必要と考えるのであれば、ネットワークを組むし、VG や個人に対する介入が必要なのであれば、それはそれで対応の仕方がある。この場では、共通認識。</p>	支援方策①
29	視点・手法	個別ケースから捨う、受け止める・寄り添う → 広げる(淡から濃へ)	<p>・1つでもその課題に関わるケースが見えれば、それを丁寧に捨っていくことが大切。</p> <p>・ワーカーレベルでは捨えることも、それを局長等、組織内でどう共有していくか。</p> <p>・どこへも行くところがない人に対し、まず「受け止める」、「寄り添う」という姿勢があるかどうかが重要。</p> <p>・最終的につなぐことになったとしても、つながっている、ということ伝える支援が必要では。</p> <p>・多少でもきつと支援の濃淡はあるのだと思う。DV やネグレクトの課題は、郡部ではこれから社協でも</p> <p>・働きかけが必要。新しい課題への対応を、淡から濃へ色を濃くしていくこともワーカーの仕事。</p>	支援方策①

23	社協の特性を活かした支援	支援の対象顧客は地域住民全体	対象は「地域住民」全般。未活動者へは働きかけ、活動者には、更なる活動支援をする。	支援方策①
26	社協の特性を活かした支援	視点 活動そのものの先にある「人」や「地域課題」に気づくこと、そのことに関わりが大切	例えば、手話に関心があるという方が見えたら、手話の技術を習得するだけではなく、手話を必要とする方が地域におられて、どのようなことにお困りか、地域の課題を自分で気づいてもらい、その上で、自分に何ができるのかを考えてもらうことが大切。その活動そのものではなく、その活動が必要とされている地域の背景が重要。「活動から地域の課題に目を向けるように」、という視点。「活動の先に人がいる」、ということ。	支援方策①
25	社協の特性を活かした支援	視点 社協の役割「ないものを創り出す」役割、公的に制度化したら次の活動へ	行政がきちんとできている部分には必要ないが、制度がなく、行政が対応できていない部分は関わり、制度がきちっとできた後は次の活動へ。形のないものを描いて、自分の力を出してつくっていくところ。	支援方策①
40	方策・提案	ボランティアへの理解を進めるために担当者が伝え続ける、ガイドラインをつくる	<ul style="list-style-type: none"> ・あえてふんばって、歯止めをかけないと、頼まれたら全ていくという形になってしまう。そこに歯止めをかけ、調整するというのは担当者の役目と思う。 ・理屈さえあれば、社協によって幅があってもいいと思う。伊丹市では、ガイドラインを出している。ボラセンはどういうところかを理解してもらうのにもつながっているのでは。 ・わかってもらうのは難しいかもしれないし、コーディネーターが孤立しているところもある。社協のスタッフとして必要ということを理解してもらう必要がある。 	支援方策②
30	方策・ファーストコンタクトのとり方（認知に向けて）	ニーズを出してもらうために看板をあげ、情報発信、「つながり」づくり	<ul style="list-style-type: none"> ・まず看板をあげて「来てください」という情報発信をしなければ来ないと思う。 ・ある職員が断った場合こなくなってしまう。職員全員のレベルの問題。電話を受けた職員全員が、住民市民のニーズをキャッチできなければいけない。→（組織ワーキングへの提言事項） ・組織に対して、「よく聞いてくれるところ」という信頼がないと、ニーズは入ってこないし、声も出してもらえない。いろんな方に対して、情報発信は大切だと思う。 ・そのためには、顔が分かる範囲でつながっていききたい。逆に、知らない人と関係をつくろうと思うと、こちらからの働きかけが必要。未関心層に対して、こちらから情報発信してつながることは大切。 ・未関心層とつながるときには、どのようにその人の「気づき」を生むアプローチをするか。 ・直接はつながっていない人にも、少しつながっている人を通じ、段階的につながることは可能。「つながりを広げていく」 	支援方策①
36	基本姿勢・連携	出前の姿勢とともに地域に出向き、声を拾う	<ul style="list-style-type: none"> ・集落単位に出かけるとき、専門員とコーディネーターと一緒に出かける。その中で、例えば、「お金がない」という声があれば、その声を拾って帰って、「今のこの年代の方の生活課題って、確かに経済不安だよ」ということがお互いに分かる。出かけて行き、一緒に話を聞く働きかけも大切。困りごとが面と向かっては言えなくても、小グループワークをすれば、必ずなんらかの声は出てくる。そこに、5人くらいで行き、グループに入ったり、うろろし、声を拾うことができる。している中身はどうでもいい。 ・近所の人同士がそこで話を出せる場があったら、隣の人が知ってってくれたらいいな、ということ伝えられ、地域に還っていける。そういう場づくりを進めていけたら。そのようなメニューがVCの中でも出していければ。講座ではなく、「地域に出前いきます」というもの。 ・サロンの説明会等に行く時には、いろんな地域の声を聞かせてもらう。2名位で行く。 ・ケアマネ協会等、困っている人の直接支援に関わる人等と連携して、間接支援も考えられる。 ・具体的な中身がわからなくても、とにかく、顔、場所を覚えてもらう、とにかく宣伝する。 ・郡部の兼務体制は表裏一体だが逆に強みにもなりえる。他の業務で知り得たことを強みにしていける。 	支援方策①

			<ul style="list-style-type: none"> それは、まさに、職場の中で、自分たちのミッションをいかに遂行するための取り組み、学びをみんなでやるか、理念共有するか、ということ。それがあれば、兼務がマイナスということではない。 	
60	支援方策	「入門講座」活動の入り口の事業メニューの見直し	<ul style="list-style-type: none"> どこもやっている人材育成事業。しかし、本当に地域福祉人材育成になっているのか。事業が目的化しているところもある。 うちの場合は、「時代の流れに合うテーマ、それに関心を持つ人がいることが要件」「徐々に持っていく運び方」 入門講座を気づきの入り口にしていくために・・・ 入門講座を受けても、半分以上離れていってしまう。 講座を開く時に、現場の当事者や家族、支援者から「こういうことに困っている」など、いろいろな声を聞く。すぐにはできない。ちょっと待たせておく。その間に思いがふくらむ。 今なら精神の課題について、呼びかけ、一般の人に網をかけ、入ってみると実はVの養成講座だったりする。その中で、専門的な話もあり、自分たちのストレスの回避方法もわかり、当事者のストレスや状況もわかり、自分たちの偏見も分かり、それをなくすためにどうしていけばいいか、動いていけるよう、少しずつ誘導していく講座を組む。当事者の方や家族に話を聞いたり、交流したりして、定期的に話し合う会をつくろう、といい、順番に広げていく。 技術的には講師に「こういうことをしてほしい」と伝える。特別なことをしているわけではない。それほど他の講座と変わらないと思うが。ただ、時代の流れと、その課題に関心を持つ人が数名いることは、基本。展開のしかた、運び方ではないか。 まずはテーマがあり、課題があり、共感が広がっていく、という運び方か。 半分以上が、自身が精神的なストレスをもっている人。当事者、家族もおり、ともに講座を受けた。 テーマのない入門講座は、必要ないと思う。 	支援方策②
55	支援方策	インテークの大切さ	<ul style="list-style-type: none"> 課題を持っている人が、どこで、それを声に出すか。地域での座談会で出すとか、直接福祉専門員に話をするとか、ボラセンにやってくるとか、いろいろある。それを課題として受け止めるのか、そのままいくのか。 ・・・受け止め方って、かなり大事だと思います。センスか。個人の資質もあるが、それに縛られてしまっはいけない。どうしていくか。 場づくり、機会づくり、ワーカーの受け止めの姿勢 	支援方策②
69	支援方策	個人活動者のグループ化支援について	<ul style="list-style-type: none"> 思いを持った個人の「仲間づくり支援」って、結構大変では。思いを持った人の仲間づくり支援も、社協VCの大きな支援テーマでは。 案外、それをしっかりできたことはない。「自分ひとりで思っている」という人をサポートできていないかもしれない。その人が自分の思いをしゃべれていけばいいが、人に伝えるとき、まとまっていなくて伝えられない。思いをまとめ、明確化することを支援する。 	支援方策②
71	支援方策	講座のコツお客さんにしない、主体的な役割づくり、「意識づけ」	<ul style="list-style-type: none"> 来る人が自分の意識でくる、という「意識づけ」をしっかりしている。 司会や茶話会の運営などは、参加者にさせていただく。(コツ!) お客さんではなく、自分も関わっているという意識を持ってもらう! 思いをもていただくことは、大切。 	支援方策②
70	支援方策	思いを持った個人の支援について	<ul style="list-style-type: none"> こちらから「こういう活動を育てたい」と戦略を練っていくのと、思いを持った方が来られるのでは、関わりが違う。 社協としても、それは重要課題と感じていれば、「ともにやりましょう」とできるが、 個人レベルでがんばってください、というところは、どう関わるか、課題。 じっくり話を聞いてみて、目的をもって、こういうことができるから、とおっしゃる方は、なんらかのコーディネーターができると思うが。ぼやっとしている人には、ぼやっとしかできない。 立上げ支援という支援をどうするか。 社協の問題意識と一致すれば、ともに進めていける。 	支援方策②

51	支援方策	住民との接点づくり・変容支援の手法② 講座方式（春日町式）	<ul style="list-style-type: none"> それは、その人の課題に対する地域の理解が薄いということ。薄い部分を濃くしていく取り組みが必要。ポラセンでは薄い部分を濃くしていくための講座ができる。講座を通じて、その方を支援する輪をつくる手法を持っている。講座を通じて、どれだけ、その課題に共感する人が出るか、わからないが、働きかけできる。講座の組み方、アクションの手法によって、その人を支援する人が30名できる。そのような人材を生み出せるのは、ボランティアセンターの強みだし、大きな支援といえる。 H町であれば知的障害者の支援の輪がどんどん広がっている。その課題が何かは、地域による。 当事者組織の組織化の支援、支援組織の組織化。輪をつくり、広げていくための支援。課題の内容は、地域性による。 一律の行政と違い、社協がやり易いところ。 	支援方策②
52	支援方策	住民との接点づくり・変容支援の手法② 出前方式（村岡町式）	<ul style="list-style-type: none"> うちのまちの場合、講座によるひとを集めることが非常につりにくい。一番初めに、未関心層をいかに引き込むか、ということが課題。活動者があふれているわけではないから。うちの場合、「そこにいけば、人が集まっている」という場に出前を出向いていく、という手法のほうが、効果的。 そういう形で地区に出て行く「福祉ミニ集会」というものを毎年開催している。 そのときに、専門員を含め、数名で出かけていく。地域課題の捉え方、というのを、地域福祉部の方から、テーマをもらい、どうとらえるのか、個人の話にしないで、地域の課題としてとらえるために、集落単位に話を持っていく、ベースを作っていく。（社協としていっているが、ポラセンの色はだせない） そうすると、「何に気づけばいいか」というところを、隣近所の人に気づいてもらえることが、無関心層を巻き込んでいくためには、うちの場合には有効。 それぞれ社協により、地域性により、得意分野がある。課題のとらえ方、展開の仕方は、それぞれでいいと思う。これを読んだ担当者が、「これだったらうちでも使える」「これは難しい」というのがあっていい。 地域課題の共有に向けて、必ず、その下地になる場面がある。 村岡式で地域をベースにした上で掘り起こしが必要であれば、地域の場で声を出してもらい、それを社協職員も、隣近所の人も共有する。その上で地域の課題にするための場を丁寧につくり、丁寧にひろい、バックアップを行っていく、という支援のスタイルか。 講座により、共感者を増やしていくスタイルも。いちど来た人は逃さない、そのつかまえかたを教えてほしい！ 個の課題を地域をベースに広げていく、その広げ方は、いくつかある。地域を切り口にしたり、活動テーマを切り口にしたり・・・いろいろなアプローチがあり、自分のところで参考にできそうなところは参考にしてください、というスタンスでいいと思う。 	支援方策②
59	支援方策	情報発信について人をひきつけるために（たくさんの看板＋常に刺激、新要素）	<ul style="list-style-type: none"> 今までは、個人へのアプローチがいろいろとできてきた。場所、組織それぞれの出前型の話、地域の課題から気づきに持っていく話などが出た。 表では、情報に関する支援については、さまざまなところで情報提供することがあるが、これは今皆でやっている。 さまざまなアンテナを立てても、立てたものが活きるには、プラスアルファが必要。 たくさんあっても、同じだと意味がない。同じものでも新しい要素を常に入れ続ける必要がある。努力がいる。 インターネット等新メディアの可能性。若者など、今つながっていない対象とつながるために。 大学生や高校生は「何見てきたの？」と聞くとインターネットという答えが多い。ボランティアが市町VCのHPつくっているところも。 	支援方策②
56	支援方策	地域課題の把握と都市部の手法	<ul style="list-style-type: none"> また、ワーカーがどういうところにそのような課題を持った人がいるということを把握しておくことも必要。把握無しには、広げていくこともできない。 人口規模による部分も大きい。都市部で、いかに住民と接点を持つ 	支援方策②

			<p>ていくか、は課題では。手法が郡部とは違う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・うちでは、9箇所にかけて、地区ごとに住民座談会を行っている。まだ、顔が見える。今後、小地区で人材育成をやっていけたら。(伊丹、宝塚、西宮等も同様) ・一つのくくりが何万人単位なのか、500人~1000人なのか。 ・さっき言っておられた人材育成のやり方を、自身は見たことがない。そのような手法を他のワーカーが見る機会があればうれしい。 ・ふつうのおっさん、おばさんとどう関わり、取り込むか?がテーマ。例えば、農協共済の説明会に行き、「10分だけ時間ください!」とやろうかな、と考えている。 ・全然違う集まりに社協をセットする。地域や他分野に「出前、出向き型」のアプローチする。 	
67	支援方策	未関心層への働きかけ勤労者へのアプローチ、対象別アプローチ	<ul style="list-style-type: none"> ・勤労者層は、無関心層が多い。どうアプローチするのか。 ・その層には、違ったアプローチが必要といえる。 ・対象は、「こども」「青年」「勤労者層」「子育て中親」「主婦」「OB」「シニア」などか。 ・うちはみな土地に帰る。田畑があるから。第2の人生が待っている。 ・生活基盤の違いによって、スタイルが変わってくる。 ・土地がある人は土地に帰るが、サラリーマンには帰るところがない。 ・本人が余りやりたがらないところが多い。半年くらいはぼーっとして、年の後半にアプローチをかけたほうが有効な気がする。 	支援方策②
48	支援方策、支援対象	支援方策のわけかたグループ運営支援	<ul style="list-style-type: none"> ・宝塚の表でいうと、リスク、アドバイス、資質と、ボランティアグループの自立した運営のための支援、ということも。助成金をいかに申請するか、ノウハウ、グループ運営に関わる人材育成の支援ということがあっても、活動をしている人には入りやすい。そういうグループ運営支援、というのがあるといいと思う。 ・今活動している人は、様々な社会資源を使うと思うが・・・ ・人材育成に、グループ運営も含まれるかな・・・ ・思いつくものをどんどんあげてみよう。 ・数をあげる、というより、例えば、「ボランティアセンターは参加を支援」など、このようなことをする、という根幹の支援方策が出せれば、と思う。具体的にはコラムで。 	支援方策②
47	支援方策、支援対象	・登録と資源提供の分け方「有限」、「無限」、「半無限」	<ul style="list-style-type: none"> ・以前、資源の中身について、支援を考える、ということがあった。ヒト、モノ、カネ、情報という資源の中身によって、支援を考えることがあった。それらにより、分類して、支援を考えた。(資料) ・たとえば、助成金を渡す、助成金の情報を渡す、など、無限、半無限、有限等に分けた。 	支援方策②
68	支援方策、支援対象	当事者支援とV活動(根っこ地域性による、各地でのあり方について)	<ul style="list-style-type: none"> ・突然家族を失った方への支援が、講座でできないか、と考えている。息子さんを亡くした人など・・・規模に関わらず必要と思う。 ・大事な人の喪失経験をもつ人の集まりか。 ・それぞれ県内各地に社協があるのだから、担当者の気づきや、各地の状況に応じて、画一的ではなく、それぞれの特性があっていると思う。当事者支援、と限るのではなく、メニューの提示はいくつかあって、選び、つくれば、当事者にもいろいろあるということ洗い出しておく必要もあるかと思って。毎日の仕事の中で、いつ、だれが、どういう形で気づきが入ってくるか、どんな当事者とどういう接点が生まれるか、わからない。それぞれの地域の特性を活かされ、それぞれの社協のボランティアセンターが活発であれば、それでいいと思う。 ・ここの社協でうまくいったから、別でうまくいくとは限らない。そこに、同じ思いを持った人がいないとできない。 ・チャートは、「全部やらなければいけない」ということではなく、ヒントやメニュー提示であり、選択的に取り込めるものに。 	支援方策②
社協ボランティアセンターのありかた 連携・協働について				
No	論点	小見出し	内容	ワーキング名

8	ミッション・価値	社協と他団体との連携・協働・棲み分け	<ul style="list-style-type: none"> ・棲み分けの部分を議論していきたい。利用者と供給者側、同業者間の棲み分け。協働していくこと。独自性を保ちながら、重なり合う領域に本質的なものがある。重なる領域を大切にしたい。 ・棲み分けの問題などは重要。 ・組織体制が固まってこそ手をつなぐことができる。 ・登録と支援策（助成など）は別にしないほうが書きやすいだろう。 ・他機関との「棲み分け」は必要か？棲み分けのため隙間ができてしまうことは避けるべき。 	枠組み①
12	連携	他団体との連携について	<ul style="list-style-type: none"> ・生協は自己完結の傾向があったが、これからは連携。まず、お互いに何を考えているか、わからないと。 ・今コープとは、月に1回ミーティングしている。 	枠組み①
34	連携	幅広い対象を受け止めるための体制整備活動の開発、関係機関との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・支援対象を広げる際、学校や環境分野など、他の専門分野等の関係機関との関係づくりも必要では。なければ、つくっていく、という担当者の努力も必要。品揃えをしていくことも私たちの仕事。 ・県内には、広げ方がわからない社協も。全部受け止め、全部開発する、という単独姿勢ではパンクしてしまう。それらの課題を受け止め、ともに取り組む仲間、社会資源を増やしていくということも一方で大切。仲間づくり、連携づくり、と、支援対象の拡大はセットで考えなければいけない。 ・薄い色を濃くする関わりを行っていく部分なのか、それとも他との連携によって解決していくのかは、ワーカーのセンスや力量が問われるのかもしれない。10年くらい先を読みながら進めていかないと。制度は5年かかってもなかなかできない。 ・今は、充実度による薄い・濃い。支援の力の入れようの薄い・濃いとは分けて考える。活動したい人のニーズも、分野も広がり、困っている人のニーズも分野等多様。受け止めることは前提。 ・しかし、メイン分野と開発する分野、関係機関との調整を図る分野がある。そのためにも、「こんな目的の、こういうところ」というミッションを明らかにしないと、他機関との連携もできない。 	支援方策①
87	連携・協働	なぜ連携が必要か、連携によるメリット	<ul style="list-style-type: none"> ・課題に広がり、深み（多様化）から専門機関の連携が必要に。 ・福祉分野以外とのつながりが必要。 ・機能面で、弱いところを補う。 ・他と手を結びながら、自らのスキルアップをする。 ・つなぐことでボランティア（講座修了者）が自分の地域に帰っていくこと。 ・守りから攻めの姿勢への転換が図れる。 ・人的育成の長期的・幅広いな視野が描かれる。 ・「より良い自組織」ではなく「より良いまちづくり、地域の課題解決」の視点から。 ・「自組織だけではできない」→「ミッションに向け、社会資源をつなぎあう」発想が求められるのではないか 	連携①

89	連携・協働	社協ボランティアセンターの連携を進める上で大切な要素	<ul style="list-style-type: none"> ・組織の相互理解（①大枠、②大枠で共通目的をもったところの理解、③緊急課題に基づいた実践からの理解）が必要。 ①分野的に弱い部分の連携 ②共通の目的をもって連携する際に、そのプロセスから学びあう ③機能面の弱い部分の連携 ・社協がどういうスタンスで、何を目的としているか、つなげる手をみせる。 ・「はざま」ができないよう少しずつ踏み出して自らの幅を広げ、自然に棲み分けできたらいい。 ・支援する側の自主性も必要である（情報発信等） ・組織の相互理解をベースとし、実際のアクションを通してきちんと組織理解を深めることが必要。 ・最先端の実践現場と仕組みをつくる官との乖離→距離を埋め、現場発の仕組みづくりに向けた協働が必要→知り合うための場づくり、機会づくり、つなぐファシリテートの必要性 ・自由で批判しあわない、楽しいプラス志向の場づくり ・相手方を信じ、相手方の立場に立って、物事を進めることが必要 ・普段つきあっている仲間（グループ）だけでなく、異なった考え方を持つ人やいろんな人と交わることが必要 ・「まず知ってもらう」→社協ボランティアセンターのミッション・大枠の積極的な広報 ・重なり合う部分にこそ本質がある→重なる部分で引き合う、あるいは競合するのではなく、共通項を大切に、場合によっては協働していく関係づくり。 ・「すきま」をつくりださず、共に埋めていく姿勢。 ・互いの土俵に乗りあうお互いの得意分野で機会や場をつくり、お互いに出向きあう関係づくり。 	連携①
96	連携・協働	なぜ連携が必要か？連携の受け皿としての社協について	<ul style="list-style-type: none"> ・社協は会員が地域住民だから、社協が持ち掛けると連携しやすい部分がある。 ・都市部でも、行政では堅すぎるので、社協が公的でありながら、柔らかいイメージがあるので、緩やかなつながり・ネットワークの受け皿になりうるかな、というイメージがある。しかし、取り込まれたり、がちがちのネットワークだと困る。期待できる可能性を感じさせる組織体といえる。 ・地域の課題を持っているところが発信しないと、連携の意義を見い出せない。 ・みんなが集まることの意義を見い出せないといけない。共通項の課題を中核につながること。 ・ボランティア活動支援機関同士の連携、社協 VC 同士のあり方が全く違う連携しながら取り組みを広げるためのあり方、仕組みづくりが大切。 ・内部的な連携が強みをさらに強くする面もみながら進める必要がある。 	連携②
98	連携・協働	後半の検討の焦点について	<ul style="list-style-type: none"> ・前回も出てきたが、基本的に関係団体の基本情報把握と関係が大事ということが確認されている。何かあったときに聞ける。お互いに飛び込みあえる関係づくり。どういうことをしているのか、近ければ、出向く姿勢。 ・介護保険ネットワーク連絡会、介護保険をどうまわすか、事業者間の連携には力が入れているが、一方で、ボランティア活動の連携が弱まったように思う。事業はやらないとできない部分があるが・・・ ・行政の補助金も、住民から会費もいただいている中間組織だからこそその社協の側面。 ・「参加の仕組みづくり」+「中間組織」+「住民組織体」 ・住民が参加する窓口としてのボランティアセンター ・福祉教育も大切だと思う。また、親への福祉教育も必要。「福祉より、塾へ」という意識も。 ・これまで出会わなかった人たちと出会い、気づきの機会へ。そこから、参加の窓口も意識してつくっていきける。 	連携②

99	連携・協働	連携のすすめかた（戦法と切り口、強みを活かす）	<ul style="list-style-type: none"> ・戦法として、自分たちのところでやっている事業を見直して、「これは自分たちだけでやるよりも、共に進めた方がいいのでは」という事業があれば、共にすすめていく」ということから着手できないか。既存事業の見直し→①VC知ってもらう、②ニーズにあったものに、③参加の場へ。 ・弱いところだけでなく、むしろ強いところを活かしていく。自分のところに玉がないと連携できない！福祉学習などの積み上げは社協にとって強み。学校は生協でも入りにくい。継続的な関わりには、学校は敷居が高い。 ・公民館や文化会館などをターゲットにした連携か、学校など、分野が異なる組織との連携なのか・・・ ・特定してしまわず、「ボランティア活動の推進に向け、共感する組織との連携」という緩やかな枠でいいのでは。 	連携②
101	連携・協働	連携の議論の進め方は目的ごとに整理する。	<ul style="list-style-type: none"> ・連携の目的ごとに整理をしていけばいいのか。共通の部分はあるが、「地域に根ざしている組織とつながる」、ということで、学校や公民館との連携、「ボランティア活動支援」でNPOや行政との連携、社協間ネットワークで市町社協同士の連携、など、目的ごとに整理した方がわかりやすい。 	連携②
102	連携・協働	「知られていない」前提で、出向きの姿勢	<ul style="list-style-type: none"> 2つの手のひらを用意（出向くこと・プラットフォームとなること） ・他県の事例で、市民活動支援センター設立に向け、連携・協議の場が社協外にあったとき、社協は自ら参加しにいった。そこで、社協がやっていることが知られていないことがわかった。社協のやっていることを徐々に知ってもらい、最終的に、社協が受け皿となった。 ・プラットフォームとして用意する、また、自ら飛び込んでいく、という、両面の手のひらを見せておくことが必要。 ・社協の「協議体」という性質があだとなることもある。社協のもとに行くことが抵抗ある団体もある。社協が出向くことも必要。 	連携②
103	連携・協働	提示の仕方基本＋具体的な一歩の踏み出しかた（事例）	<ul style="list-style-type: none"> ・基本は、前回出してもらったとおりでいい。 社協のやるべきこと「未関心層への働きかけ」に向け、裾野を広げていく ① 目的ごとに、今の課題（何を進めるか） ② そのために、どこと付き合っていくか（連携先） ③ 社協にとって、そことつながることのメリット ④ つながりかた（手法）、事例 ・裾野を広げることは、とても大切。興味ある斬新なことをテーマとして、出かけて来てもらわなければいけない。 ・地域ベースだと、逆にいうと、地域は逃げるが出来ない。広げて、意識の部分であげてもらえると、市民活動にもつながっていく。そこが社協の役割としては、最も大切な部分かもしれない。 ・生活課題を抱えた人が、その地域で暮らし続けていける「土壌づくり」、「地域を耕す」役割 	連携②
43	連携	他組織のとらえかた「脅威」ではなく「連携すると面白い？」	<ul style="list-style-type: none"> ・脅威ではないが、となりまちに元気なまちづくり・福祉系のNPOがある。連携することで幅が広がるんじゃないか、と思う。 ・NPOもあるが、主に県民局の丹波の森公苑が支援している。脅威ではなく、あっちはあっちでやり、社協は社協でやっている。それぞれがやっている。 ・社協も中途半端だが、どこも完全にカバーできることはない。地域に根ざしていることは社協の強みでは。 ・複数機関にダブって同じ人が登録しているようだ。県民局には、地域にねざすというより、もっと広いところでつながりたい人が多いようだ。シニア層にしても、iターンやUターンで帰ってきたような方。 	支援方策②

58	連携、協働	つきあいがいい団体といかにつながるか（連携） （村岡の場合正規ルートより、出前方式、個別につながっていく。）	<ul style="list-style-type: none"> ・チェックシートを職員に配っている。視点を広げていかないと。ボランティアセンターだから企業や学校とつながっていきける部分がある。そういうところをネットワークに入れることが必要だし、重要、ということベースにVCから発信していけたら、社協でもそのつながりを活かしていけるのでは。そういう視点を社協の他職員にも持ってもらえれば、とあって依頼した。 ・子ども、休みの日のメニューの組み方によってもそうなりうるし、会社や役場職員の集まりにいったら有効ではないか、と思う。役場の中でも地域課題に詳しい人、社協的な発想を持った人もいる。先生の集まり・・・教育委員会は可能性としては連携していきたいが、現実には難しい。 ・集合体としては立場上そうしか言えないという方もおり、同じ視点の共有は難しいこともあるが、個別に話してみると、共有できる部分が多い人もいる。役場で総務部長と話すのが難しいことも、そういう人からつながり、「次誰と話したらいい？」とつながっていく。出前型で「だれと」というのが重要。 ・学校の中でもすごくセンスがいい人もいる。教育者という立場で言っている人と、そういう人とは、大きなギャップがある。 ・「これまでアプローチしたことのない団体との付き合い方」としてコラムなどがあれば、読みたいのでは。正攻法・個別から、など、アプローチ方法を示す。みな思っている、文字として見ると、みな心強いのでは。 ・努力目標は一定必要。コラム的に成功事例を示せば。 	支援方策②
88	連携・協働	社協ボランティアセンターの他団体との連携に向けた課題について	<ul style="list-style-type: none"> ・市民の理解がまだ得られにくい面（例ボランティアに対する共通理解） ・全国組織だが外部に開かれてはいない。（ネットワークを活かしていない、閉鎖性→知られていない） ・VCの組織における位置づけは市町によってバラバラ。 ・外部からは全く見えない部分。 ・社協は民でなく官というイメージがある。 ・お金を持っているという点で結びついている側面もある（助成金等） ・市町によって、特定の課題への取り組みの進み方が全く違い、広がりもほとんどない。全市町にあるネットワークを活かしていない。社協VC間の連携も必要では。 ・登録制度により、セルフヘルプグループは排除されることがあり、つながりをつくりにくい。 ・有限な支援と結びついた登録制度等による排除も見られる→つながるための情報把握の仕組みづくり 	連携①
90	連携・協働	社協ボランティアセンターの連携に向けた事例	<ul style="list-style-type: none"> ・震災10年事業として、社協ボランティアセンターだけでなく、多くのボランティアや市民が関わって（連携して）協働・参画できたこと。 ・東灘区社協ボランティアセンターの「ボランティア交流会」の事例お互いが知り合い、交流するための工夫（楽しいムードづくり、わかりやすい大きな名札、小規模グループワーク、交流に向けたコーディネーターのファシリテート等）が豊富で、さまざまなグループがあること、ひとつひとつの活動内容が分かり、今後つながっていきたい相手に会うことができた。 民営民間の中間支援組織も交流の機会を利用して場に参加、情報を得た事例 ・宝塚のコープとVCの連携、ワーキングの事例（連携、あいのりの姿勢から協働へ） ・三田市社協のつながりバンク、三木市社協の登録見直しの事例（窓口（登録）の見直し、手をつなぐ仕組みづくり、敷居の低いVCづくりの工夫） ・加西市社協の実行委員会の事例 	連携①

100	連携・協働	公民館との連携について	<ul style="list-style-type: none"> ・事業をすることで人がやって来る。趣味の場になってしまっている。 ・公民館は教育委員会の社会教育の主管になり、敷居が高い面がある。 ・人のパワーとしては大きい。 ・小地域ごとにあり、自主的な活動の拠点であり、ハードとしても、ソフトとしても、社会資源として魅力的。 ・趣味の活動でも、人に認められたい、という部分がある。そこで、つながり、ハシの場をつくる、また、ふれ合いサロンなどの場でプログラムとして活かしてもらうことができる。そこから自分だけ、仲間だけの趣味活動から、社会的な視点を持っていただく。 ・つながるには、グループとしてつかんでしまうと、つながりやすい。 ・実行委員会方式でつながると、「この部分は任せます」と権限委譲できる。 	連携②
4. その他（連絡体について、等）				
No	論点	小見出し	内容	ワーキング名
77	V連絡体について	連絡体の役割について	<ul style="list-style-type: none"> ・連絡体とボラセンの関係がファジーなままである。連絡体のコミットメントはいる。 ・明石では100グループほどをまとめているが不可能。標準化して、10～20を束ねる連絡体をつくって、ネットワークする発想が必要。 ・分野別連絡体と地域別連絡体に分けるが、活性化させるためには、地域別連絡体の中の部会制など議論すべきだったがそれがなかった。 ・連絡体は、グループづくり、新しい地域課題に対するニーズの発掘と対応、組織化などはあまり一生懸命にやらない ・職員のスキルに問題を投げてはいけませんが、VCの独自性、役割が整理されていない。 ・運営委員会でも分野別の代表とかの人が出て行くのが良い。 ・センターとボラ協の関係も整理した方が良い。プラザとボラ協の関係も同じ。 	組織①
議論・検討のすすめ方、報告書作成に向けて				
No	論点	小見出し	内容	ワーキング名
74	議論の進め方	このワーキングのゴール	<ul style="list-style-type: none"> ・登録のあり方、助成、情報など、どこまで行かなければいけないのか。 ・一定の方向性は出ていると思う。開ける支援は開いていく。 ・画一的な形の提起は無理。登録では、少なくとも「情報把握、お互いに知っておく」 ・社会資源の把握、登録と支援を切り離す、など。支援枠の外に目を向ける。 ・顧客が一番外側（住民全体、諸組織）、その中で色の濃い顧客がいる、という位置づけ。 ・支援の工夫をしている取り組み事例を、いくつか紹介。具体的な全県共通事項の提起はしない。 ・読み手が読んで、自分のところの現状と照らして、取り込みたいと思った要素を選択的に取り込んで、前向きに「より良いあり方に変わっていく」動きを支援できれば。現場で、動きを起こすための指針となればと思う。 	支援方策②
41	議論の進め方	ミッションの指針を示すこと	<ul style="list-style-type: none"> ・支援方策を考える前に、ミッションを考える必要がある。 ・ミッションをみると、ある程度支援方策が見えるような形になるのでは。つくるのは各市町村だが、指針となるものがつくれば。視点を大雑把に分けると、以下の2点で整理しては。 ①社協のいい点（DNA） ②今だからこそやっていくという視点 	支援方策②

15	検討の目的	社協の共通ミッションを明らかにする	<ul style="list-style-type: none"> ・社協の理念は共通ととらえてきたが、社協職員が地域住民に語る物語を共通に語れていない。 ・VCのワークをした時、彼らは自分の組織のミッションが語れなかった。 ・県内社協ボランティアセンター間で大事にしたい「共通のワード」を考える。 ・うちの場合は、社協のミッションがベース。 ・事例については、コラム的に扱うことに意味があって、一人ひとりが考え納得する必要がある。各項目でコラム用に1ページを開けておく方向で。 	枠組み①
16	検討の目的	社協の共通DNAを明らかにする、普遍的な価値、行動的な価値を明らかにすること	<ul style="list-style-type: none"> ・社協ボランティアセンターの弱み・強みという言葉はどうか。独自性という言い方もあるが。 ・強み、弱みについて委員会ではこういうものが出てきたという出し方もできる。それだけでは面白くない。 ・抽象化するのか、地域に特化した強み弱みもある。 ・地域に特化したものは、市町独自でやっていただかないといけない。共通するものはここで考えてもいい。郡部と市部で違うものが出てくるだろうが。 ・社協が持っているDNA的なものは共通しているのだろう。 ・不変的な価値と、行動的な価値がある。後者の行動価値は時代の流れで整理しなければならない。 ・取り巻く環境についてはいろいろな地域性を出していただき、ホームワークで検討した方が効率的では。 	枠組み①
4	最終報告作成について	最終報告の発信形態	<ul style="list-style-type: none"> ・行政は、ニーズを持っている人の支援より、活動者を支援しよう、と考える人が多い。どうつながるのか？ ・「目指すまちは、こんなまちがいいですよね」という共有が4章にあり、共通の目標が持てればいい。 ・誰が読むのか？他の人で全部読めるのか？1～3プラス4の概要版など、3種類ほど必要では？ 	枠組み①
11	最終報告作成について	最終報告書の発信対象多様であるべき	<ul style="list-style-type: none"> ・活動者に読んでほしい。パターンは多く用意したほうがいいように思う。 ・最終報告の対象をもっと絞ってはどうか。担当者へはコーディネートマニュアルでいいのでは。 ・誰に読ませたいか？当然活動者は必要と思う。活動者、市民・住民に、いかに成果物を見てもらえるか、という視点が必要。担当者が持って行って、説明できるようなものに・・・ ・所長や局長が変わらないと、活動をサポートする側の姿勢が変わらないと、支援のあり方も変わらない。 ・組織全体として取り組んでいかないといけない。実際に動かしていくためには、組織の幹部にアプローチが必要。 ・担当が「ここに書いてありますやん」と押し切っていく必要があるのでは。 ・組織の中で浮いていていいが、地域で浮いていてはいけない。これまでの組織の体質では変わるの是非常に大変。 ・所長や局長にもアプローチは大切だが、活動者が読んでいけないことはない。共通の座標軸で、ベースを同じにして、見せることは大切。 ・支援組織としては、社協向けなのか、全市の人が対象なのか。 ・前半は全体を対象。NPOもコープも文句のないところ。社協として、今後、他に対するラブコールをどう出すのかを明らかにするか。何を指すのか、目的は結局同じで、重点や強み、方法が若干違う、ということであれば、外からもとてもつながりやすくなる。(同意) ・地域社会や市民に突出した部分でのVCのあり方を求める。社協が基盤になって出ている公の装置であるVCとしての役割への「気づき」を支援するものではないか。 ・中にも、外にも使える。市民が社協を点検する。 ・社協が地域で役割を果たしているのであれば、大いに発信したらいいと思う。 ・特化したらいい。昨日、コープと共同であるプレゼンをしにいった。お互い予算がないので、補助金をとりにいった。機関としては別々だが、共通の目的に向けて、ともに行動をおこした。気づいてどう変わ 	枠組み①

			<p>っていくか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域性の課題をいかにこの検討に落とししていくか。特化した、社協にこだわった部分を、共通の気づきの成果物にしていけるか。基本スタンスは「あの人も、この人も」共通の座標軸を設定しましょう、ということ。特に、「行政職員にはこの章を読ませたい」など、使い方を考えていく。県民局にも必要。はたを振りすぎてもいけないが、方針提起は必要。 ・県自体も参画と協働、地域づくりの方向に動いているので、提起しやすい時期ではある。 ・社協が何を考えているのかの部分も外にも発信してほしい 	
2	最終報告作成について	中間報告書の改善点(最終報告書に向けて)	<ul style="list-style-type: none"> ・「なぜ、ボランティア活動によるまちづくりがいいのか」、意義をしっかりと確認する必要がある。突き詰めると「市民自治を進めることを目指す」に行き着くのでは。 ・あるべき論ではなく市民自治の視点からもっと論理的にかく必要がある。 	枠組み①
63	報告書の事例	・コラムの候補について	<ul style="list-style-type: none"> ・コラムの候補はもう決めてもいいのか。 ・「気づきの広場」はいい事業だ。無関心層をどうその場に引き寄せるか、また、次の展開をどうするか、が、今の課題。これからも、こだわって5年間ずっと毎月講座を打ち続ける。そこから見えてくることがあると思う。 ・もしできれば、全く知らない他団体との手のつなぎ方も考えたい。 	支援方策②
21	論議の進め方	これまでの検討と新枠組みとの整合性	<ul style="list-style-type: none"> ・情報発信はどこにあるのか。 ・第4章の支援方策の部分に入れ込む。今日の議論を含め、情報開示と責任や福祉学習や啓発などのことなども入れる。 ・枠組みワーキングは大事。委員にコメントを求めることもできる。 	枠組み①
22	論議の進め方	ワーキング・今後のスケジュールについて	<ul style="list-style-type: none"> ・期日の想定を厳密にして、ストーリーを具体的にしなければ工程が見えない。 ・ワーキングの権限と位置づけが不明確。それぞれのワーキングで決まったことがもう最終でいくのか、委員会全員で集まって決めるのか。 ・ワーキングでは各支援策について話してきたが、支援目標・戦略や支援計画づくりなどはどうするのか。 ・支援策で一つ、組織で一つ、戦略で一つというイメージ。連携でも一つ。 ・枠組みと戦略は共通するので今後枠組みワーキングで戦略ができる。 ・具体的な支援策についても枠組みワーキングでできるのか ・情報の部分ができていない。活動者側から見た視点で支援策が抜けていた。 <p>ワーキング ①支援方策 ②組織体制 ③ 連携・協働の3つ。</p>	枠組み①
19	論議の進め方	助成制度の変更と検討との関係について	<ul style="list-style-type: none"> ・助成については県の助成制度の変更についてはどのように扱うのか。 ・制度の運用のあり方を考えていた。ここのメニューについては取り上げるつもりはない。 ・あってはならない姿、問題点も出されているので、方向性・方針提起の形で出していけたら。 ・紙ベースだと陳腐化する。発信拠点リストやHP案内などを入れたら良いのでは？生きた情報が取れる。 	枠組み①
1	論議の進め方	枠組みワーキングの位置づけ	<ul style="list-style-type: none"> ・本ワーキングは、これからの検討委員会の検討と成果物が、ボランティア活動推進に向けて有効に機能するよう、委員の力を引き出し、全体の工程管理・内容チェックを行っていく、という位置づけで良いか。 	枠組み①

13	最終報告作成について	活用や対象を視野にいれた構成の工夫について	<ul style="list-style-type: none"> ・この冊子の活用方法などもあれば。 ・対象ごとに対応したものをつくるということだが、形態は一冊の本ということでもいいか。その上で、「この部分は誰に重点に読ませたい」、など明確化して提示しては。 ・前書きでここは誰に読んでほしい、など、入れてはどうか。 ・調査結果は調査結果として巻末にまとめたほうがいいのでは。 ・コピーしたらページが割れないように、など、構成も考えたほうが良い。最終報告書は、各章結構ボリュームがある。自己評価のチェックシートなどがあったら。 ・「社協 VC の支援戦略」というタイトルは、誤解を避けるため「社協 VC としての支援戦略」としては？ ・戦略という言葉でなくても良いのでは？支援方策など。 ・考え方の整理に、コーディネーターの人材育成、コミュニティワーカーなどの視点も必要。 ・公的財源による支援が多い中、情報開示・自己評価が求められている。社協 VC の自主財源づくりも視野に入れては？また「地域活動とテーマ型活動の結びつきが可能」という点を社協のウリとしては？ ・市民の変化を環境の分析に入れるべき。介護保険を見ても、利用者が生の声を出すように変わってきている。する側も変わってきている。助成のあり方を考えるときにもこの視点は必要。 ・市民性の高まりがまだ低いところもある。都市部で言われていることはいずれ町部にもあてはまるが、情報開示の必要性などそのことに気づけていないことがまだまだたくさんある。 ・市民の意識に差がある。意識の差の広がりについてどう対応していくかが課題。 ・先行資料があるものについては、関係資料の紹介でいいのではないか。 	枠組み①
17	最終報告作成について	他事業との関係について	<ul style="list-style-type: none"> ・ささまち4とあわせて計画化することを見せておくと良いのでは。中長期の計画とあわせて。 ・市民の目、市民の側の変化、財源問題、担い手の問題。 	枠組み①
14	最終報告作成について	提示の仕方と各地での活用	<ul style="list-style-type: none"> ・推進方策に合わせたリストなどは必要では？いくつか例示し、コーディネータが各自でヒットするものを選べるものを。オリジナルのチェックリストは必要。地域ニーズからみた仕方。情報提供も必要。 ・理念は都市部も田舎も共通。最先端のボランティア推進の方策を示し、その地域の中で何をつくるか決める。ワークに使えるものがあればいい。地域の課題を、皆で咀嚼して考えることがスムーズになる。 	枠組み①

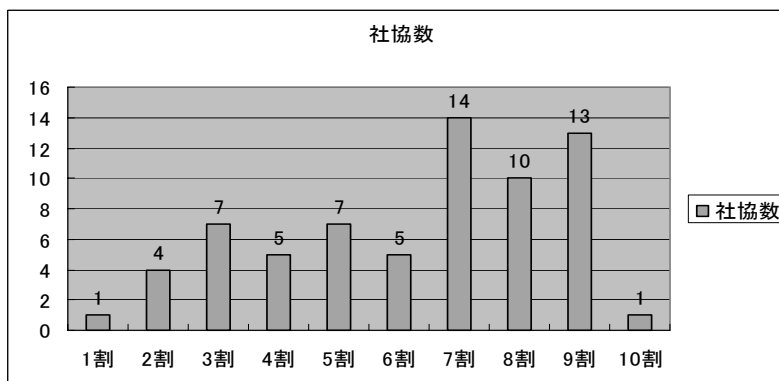
市町ボランティアセンターでの取り組みの現状に関する調査結果(抜粋)

(平成16年1月に県内市町社協ボランティアセンター担当者にアンケート調査を実施)

	市部	町部	合計
調査回答状況(22市66町) 回答(母数)	22	53	75

<登録について>

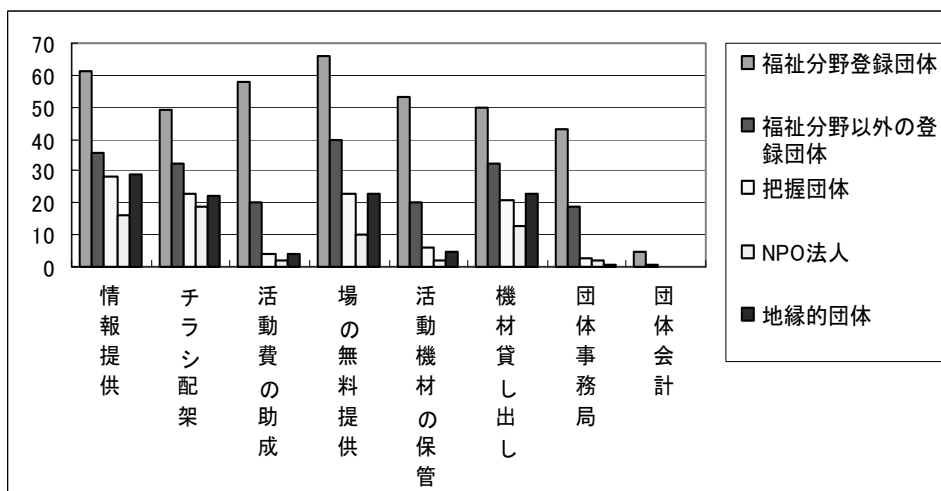
- 現在登録している団体数は、当該市町域全体のボランティアグループ数の何割だと推定されますか。(推定)



- 現在ボランティアグループ登録に関して、団体区分ごとの登録について教えてください。

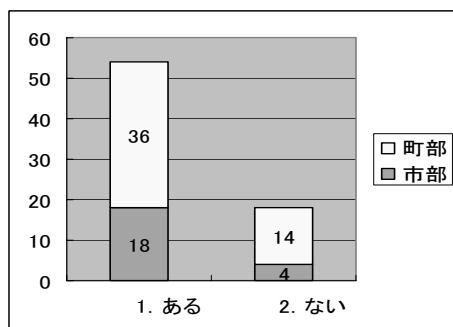
	NPO法人	福祉分野以外の団体	有償非営利活動団体 (実費程度の利用料を徴収)	有料サービス提供団体 (実費以上の利用料を徴収)	コープ登録グループ	公民館登録グループ	社会貢献活動を行う企業
登録できる	25	51	34	12	40	51	46
登録できない	16	9	15	34	8	7	8
見直し検討	14	7	6	1	5	4	6
共済加入受付OK	43	61	41	25	77	56	52
小計	55	67	55	47	53	62	60

- 登録グループに対して、センターが行っている具体的な支援内容をお聞きします。

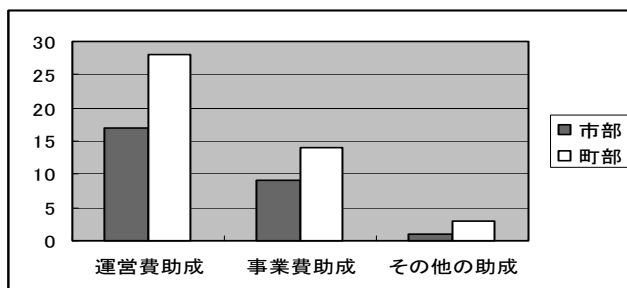


<助成について>

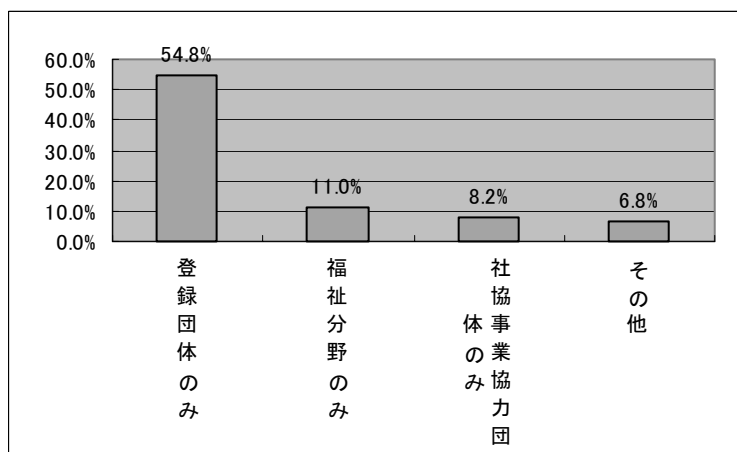
●あなたのセンターでは、ボランティアグループに対する独自の助成制度がありますか？



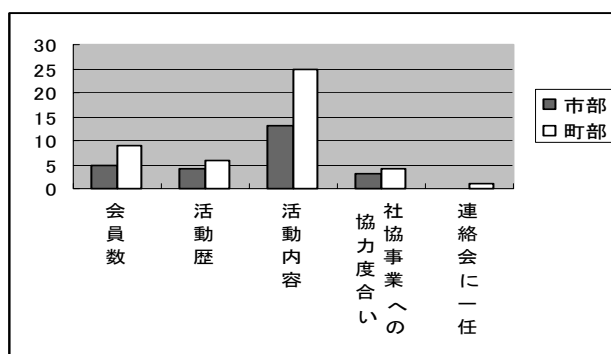
●助成制度がある場合、助成内容はどのような経費に対するものですか？（運営費／事業費）



●助成にあたり、団体の要件はありますか。

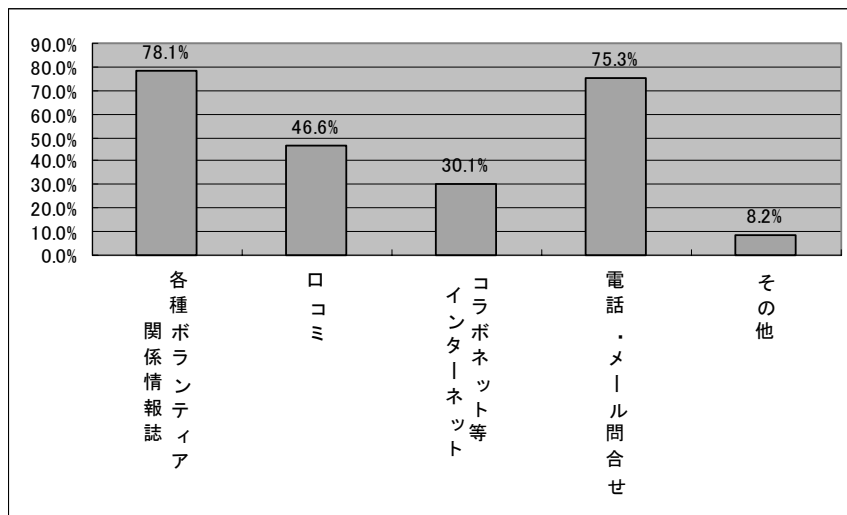


●助成額を決定するにあたり、主として何を斟酌していますか。



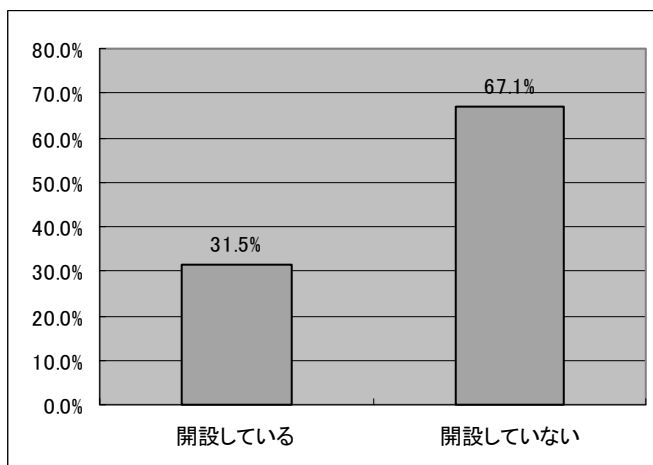
<情報について>

- あなたのボランティアセンターでは、活動希望者や住民から、講座開催の問合せや物品寄贈先等の問合せがあった場合、どんなツールを使って情報収集・発信をしていますか？



※その他：各グループからの情報。・ケーブルテレビ。・関係機関と情報交換。・広報・チラシ・町内放送。・社協だより

- あなたの社協では、情報発信のために、ホームページを開設していますか？



市町域でのボランティア活動推進方策検討委員会 設置要綱

（目的）

第1条 地域におけるボランティア活動の振興を図るため、参画と協働を進める地域拠点としての市区郡町社会福祉協議会ボランティアセンター（以下「市町ボランティアセンター」という。）のあり方及び市町ボランティアセンターで展開する効果的な支援方策について検討する「市町域でのボランティア活動推進方策検討委員会」（以下「委員会」という。）の設置及び運営に関して必要な事項を定める。

（検討内容）

第2条 委員会は、市町ボランティアセンターに関する次の事項について協議・検討を行う。

- (1) 支援の対象
- (2) 登録のあり方
- (3) 助成制度のあり方
- (4) 他の支援機関との連携・協働方策
- (5) プラザとの関係のあり方及び役割分担・連携
- (6) その他前号に関連する事項

（委員会の構成）

第3条 委員会は、15名以内の委員を持って組織する。

2 委員は、ボランティアセンターに関わる市町社協役員・学識経験者等から選任し、兵庫県社会福祉協議会会長が委嘱する。なお、委員会には必要に応じて、専門家・活動者を招くことができる。

3 委員会に委員長・副委員長を置き、その選任は委員の互選とする。

- (1) 委員長は委員会を総理し、委員会を代表する。
- (2) 副委員長は委員長を補佐し、委員長に事故ある時は代理する。

（任期）

第4条 委員の任期は、平成17年3月31日とする。

2 欠員により補充された委員の任期は前任者の残任期間とする。

（会議）

第5条 委員会は、委員長が招集し、委員長が会議の議長となる。

（ワーキンググループ）

第6条 委員会は、専門の事項を調査審議させるためワーキンググループを設置することができる。

（謝金）

第7条 委員（兵庫県社会福祉協議会及び行政の職員である委員を除く。）が会議その他の委員会の職務に従事したときは、別に定めるところにより、謝金を支給する。

2 第3条第2項により出席した者に対しても前項に準じて謝金を支給する。

（旅費）

第8条 委員が委員会の職務を行うために、会議に出席し、又は旅行したときは、旅費を支給する。

2 第3条第2項により出席した者に対しても前項に準じて旅費を支給する。

（庶務）

第9条 この委員会の事務は、兵庫県社会福祉協議会ひょうごボランティアプラザにおいて処理する。

（その他）

第10条 この要綱に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員長が定める。

（付則）この要綱は、平成15年10月1日から施行する。

市町域でのボランティア活動推進方策検討委員会 検討経過

(平成15年11月 ~ 平成17年2月)

日時	委員会スケジュール	検討内容等
平成15年 11月 12月	委員会 ①	・市町域でのボランティア活動推進方策検討の枠組みの検討
	委員会 ②	・検討の枠組み、社協ボランティアセンターの支援対象の検討
平成16年 1月 3月	委員会 ③	・社協ボランティアセンターの支援対象の検討
	委員会 ④	・「地域福祉の推進」との関係の検討
5月	中間報告書作成	●委員ヒアリングの実施
	委員会 ⑤	・中間報告提起内容の共有・協議
6月	県内社協ボランティアセンター連絡会議にて 検討内容の報告・共有	・中間報告提起内容の共有・協議
	委員会 ⑥	・検討枠組み・方法の再検討
7月	枠組みワーキング①	・検討枠組みの再検討 ・検討ゴールの設定 ・ゴールに向けた過程の検討
	委員会 ⑦	・枠組みの共有・決定 ・検討ゴールの検討、決定 ・ワーキングチーム分け
9月	支援方策ワーキング① 組織ワーキング① 連携・協働ワーキング①	●「環境」「ミッション」「特性」について、社協職員委員のキーワード出し合い
	支援方策ワーキング② 組織ワーキング② 連携・協働ワーキング②	・「支援方策」、「連携・協働」、「組織」各ワーキングごとに、小グループでの検討を2回ずつ開催 ・最終報告で発信したい内容を協議
10月		●検討内容の論点整理 (協議内容の見出し付け、分類・並び替えによる整理：巻末資料参照)
		●最終報告案骨子を作成
平成17年 1月	枠組みワーキング②	・各ワーキング検討事項の共有と検討 ・最終報告書骨子案の検討
	枠組みワーキング③	●最終報告書素案の作成 ・最終報告素案の検討
2月	市町社協あり方検討の共有ミーティング	・全県の担当者を中心にこれまでの検討のプロセスと内容を報告 ・社協ボランティアセンターの「使命・役割」の共有
	委員会 ⑧	・報告書最終案の検討 ・報告書(検討内容)の活用について検討
3月	最終報告書作成	

市町域でのボランティア活動推進方策検討委員会 委員名簿

平成 15 年度 委員名簿

属性	団体名	所属 役職	氏 名	備考	
地域ブロック	神戸	神戸市社会福祉協議会	ボランティア情報センター 所長	小池 裕	
	阪神	三田市社会福祉協議会	ボランティア活動センター 地域福祉活動コーディネーター	大村 和也	
		宝塚市社会福祉協議会	ボランティア活動センター 所長	荒木 澄美	
	東播磨	三木市社会福祉協議会	ボランティアセンター 所長	稲見 秀行	
		加西市社会福祉協議会	ボランティア・市民活動センター センター長	大藤 由美	
	西播磨	姫路市社会福祉協議会	ボランティアセンター 主事	渡辺 越子	
	但馬	村岡町社会福祉協議会	ボランティアセンター ボランティアコーディネーター	岡田 奈智子	
	丹波	春日町社会福祉協議会	ボランティア・市民活動センター ボランティアコーディネーター	田村 ひろ子	
淡路	北淡町社会福祉協議会	福祉活動専門員	凧 保憲		
関係団体	生活協同組合コープこうべ	生活文化・福祉部 統括部長	山添 令子		
	ひょうごセルフヘルプ 支援センター	代表	中田 智恵海		
	兵庫県ボランティア協会	理事	佐伯 高曦		
行政	兵庫県	県民政策部 県民文化局 参画協働課 課長	藤井 隆		
行政	兵庫県	健康生活部 福祉局 社会福祉課 課長	吉田 裕明		
学識経験者	関西国際大学	人間学部 助教授	成田 直志	○	

※○は委員長

●平成 15 年度 事務局 ひょうごボランティアプラザ

(所長 小森 星児 / 事務局長 鬼頭 哲也 / 事務局次長 東 陽次郎 /
副部長 馬場 正一 / 主事 荒木 千晴 / 主事 高橋 操実)

平成16年度 委員名簿

属性	団体名	所属 役職	氏 名	備考
地域ブロック	神戸	神戸市社会福祉協議会	福祉活動部 部長	小池 裕
	阪神	三田市社会福祉協議会	ボランティア活動センター 地域福祉活動コーディネーター	大村 和也
		宝塚市社会福祉協議会	ボランティア活動センター 所長	荒木 澄美
	東播磨	三木市社会福祉協議会	ボランティアセンター 所長	稲見 秀行
		加西市社会福祉協議会	地域福祉推進室 室長	大藤 由美
	但馬	村岡町社会福祉協議会	ボランティアセンター ボランティアコーディネーター	岡田 奈智子
	丹波	丹波市社会福祉協議会 春日支所	ボランティア・市民活動センター ボランティアコーディネーター	田村 ひろ子
	淡路	北淡町社会福祉協議会	福祉活動専門員	凧 保憲
関係団体	生活協同組合コープこうべ	生活文化・福祉部 統括部長	山添 令子	
	ひょうごセルフヘルプ 支援センター	代表	中田 智恵海	
	兵庫県ボランティア協会	理事	西村 利也	
行政	兵庫県	県民政策部 地域協働局 参画協働課 課長	藤原 純一	
	兵庫県	健康生活部 福祉局 社会福祉課 課長	圓尾 辰夫	
学識経験者	関西国際大学	人間学部 助教授	成田 直志	○

※○は委員長

●ワーキンググループの編成

ワーキング名	ワーキングメンバー
支援方策ワーキング	大村 和也、岡田 奈智子、田村 ひろ子、凧 保憲
組織ワーキング	荒木 澄美、稲見 秀行、成田 直志、西村 利也
連携・協働ワーキング	大藤 由美、小池 裕、中田 智恵海、山添 令子
枠組みワーキング	荒木 澄美、大村 和也、凧 保憲、成田 直志、山添 令子

※50音順

●平成16年度 事務局 ひょうごボランタリープラザ

(所長 小森 星児 / 事務局長 白桃 繁 / 事務局次長 東 陽次郎 / 主任 永安 雅実
/ 主事 蓮本 浩介 / 主事 荒木 千晴)

●編集・執筆担当一覧

第1部 第1、2章 馬場 正一、荒木 千晴
第3章 蓮本 浩介
第2部 荒木 千晴

**市町域でのボランティア活動推進に向けて
～住民・市民の自治力の形成を目指して～
市町域でのボランティア活動推進方策検討委員会 最終報告書**

2005年（平成17年）3月発行

発行：兵庫県社会福祉協議会 ひょうごボランティアプラザ
〒650-0044 神戸市中央区東川崎町 1-1-3
神戸クリスタルタワー10階
TEL：078-360-8845
FAX：078-360-8848
URL：<http://www.hyogo-vplaza.jp/>